

## 奥能登での群発的地震活動発生域周辺の3次元比抵抗構造解析の現状

吉村 令慧(京都大学防災研究所)

### 電磁気観測の目的と実施体制

- 能登半島北西部で継続する地震活動の発生域の電気伝導度構造を明らかにする
- 地殻内に存在する水に代表される流体は、電気を流しやすい領域としてイメージされる
- 4機関の共同研究: 京都大学防災研究所・金沢大学・兵庫県立大学・海洋開発研究機構
- 2021年度・2022年度にキャンペーン観測を実施。うち陸上6か所にて連続観測を継続中

### 2021年度の観測データ解析からわかったこと(図1)

- 一連の地震活動が開始した南側クラスタから、現在最も活動的な北側クラスタに沿って電気を通しやすい領域(良導域)が存在する
- 地震の集中域は、良導域の縁辺部に位置し、深部より供給された流体が一連の地震活動の要因である可能性を示唆

### 今後の展望

- 2022年度に取得した陸域・海域の補充観測データの解析を進め、構造推定の高解像度化、深部の推定確度の向上する
- 連続観測により、流体の移動に伴う地下構造変化検出の可能性を追究

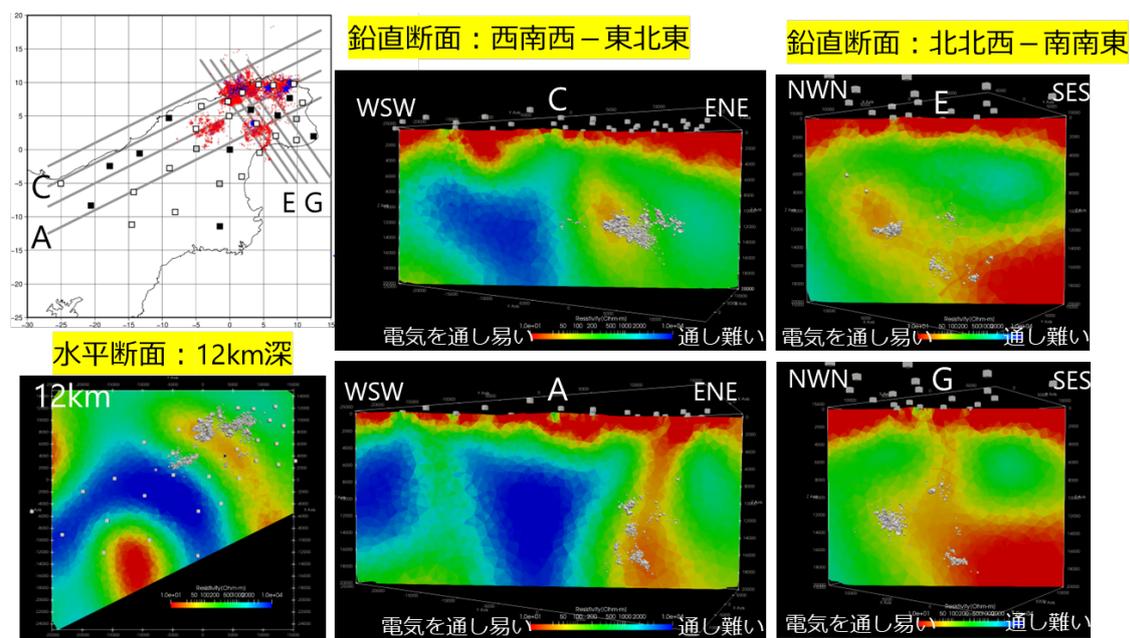


図1: 2021年度取得した電磁気観測から推定された3次元地下電気伝導度構造(地表から深さ20kmまでの鉛直4断面と地下12km深の水平断面)